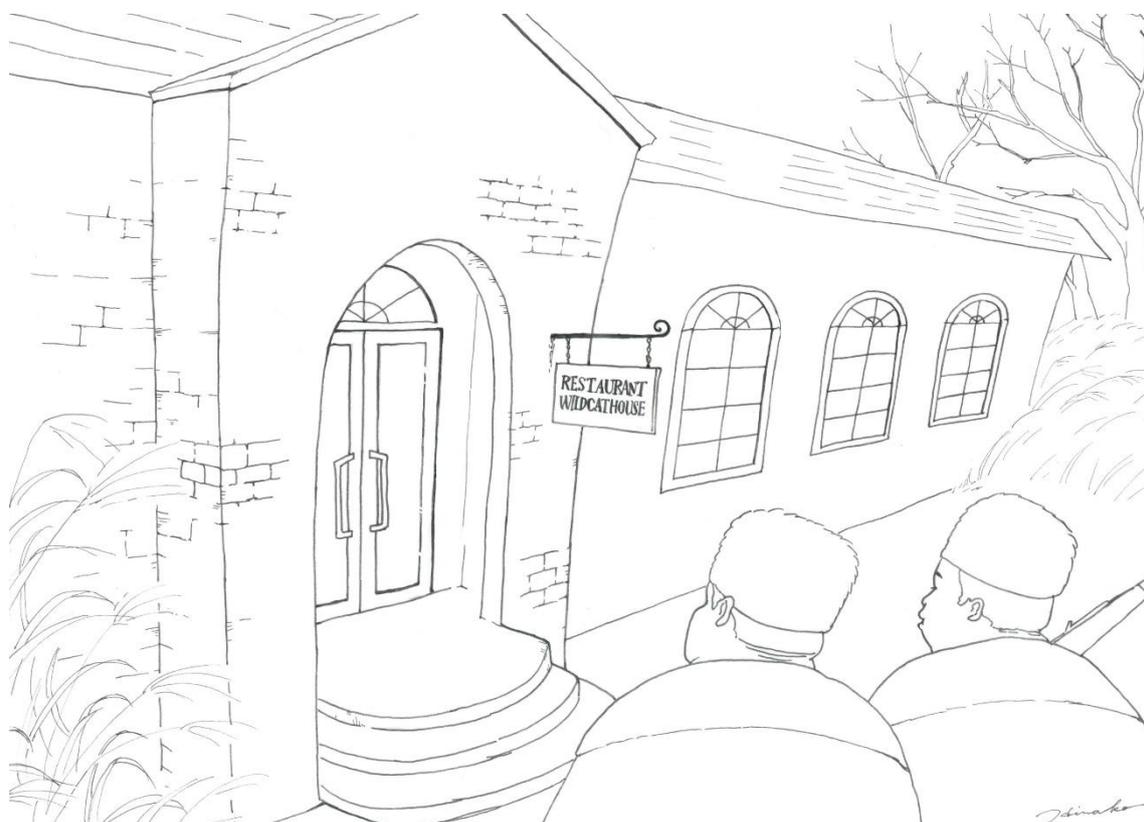


ちゅうもん おお りょう り てん
注文の多い料理店



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

へいたい ふう き てっぽう も ふたり わか おとこ ふたり ひき
兵隊のような服を着て、鉄砲を持った二人の若い男がいます。二人は、2匹
おお しろ いぬ やま き りょう
の大きな白い犬といっしょに山に来ました。猟をするためです。

やま とり どうぶつ いっぴき なん はや てっぽう
「この山は、よくないね。鳥や動物が一匹もない。何でもいから、早く鉄砲
う
で撃ってみたいよ」と、一人の男が言いました。

しか なか てっぽう う き も しか
「そうだな。鹿のお腹に鉄砲を撃ったら、気持ちがいいだろうね。鹿はくるく
まわ たお ひとり おとこ い
る回って、どさっと倒れるだろうな」と、もう一人の男が言いました。

ふたり やま おく おく き 二人は、山の奥の奥に来ていました。案内していた 猟師も途中で帰ってしま
いました。それに、大きな白い犬も途中で目をクルクルさせて、どさっと倒れ
てしまいました。

「この犬は高かったのに」と、男が言いました。

「そうだな。僕の犬も高かったのに」と、もう一人の男も言いました。

男は、もう一人の男に

「そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか」と、言いました。

男の顔は少し青いです。もう一人の男も、

「そうだな。お腹もすいてきたし、そろそろ戻ろう」と、言いました。

二人は戻ることにしました。しかし、山の奥の奥まで来たので、帰る道がわか
らなくなってしまいました。二人は迷子になってしまいました。

急に、風がどうと吹いて、草がざわざわ、木の葉がかさかさ、木がごんご
んと鳴りました。

「お腹がへったなあ」

「そうだな。もう歩きたくないよ」

「歩きたくないし、何か食べたいなあ」

「そうだな。何でもいいから食べたいなあ」

と、二人の男は言いました。風が吹いて、ススキの葉がざわざわとなっていま
す。

そのとき、ふっと後ろを見ると、洋風の立派な建物が見えました。その入り口

には、看板がありました。

RESTAURANT WILDCAT HOUSE

レストラン やまねこけん
山猫軒

「おい、こんなところにレストランがあるぞ。開いているみたいだ。入ってみよう」

「そうだな。でも、どうしてこんなところにレストランがあるんだろう。ふしぎだな。食事ができるのかな」

「もちろんできるよ。レストランって、書いてるじゃないか」

「そうだな。入ってみよう。お腹が減って、死にそうだ」

二人はとびらの前に立ちました。立派なとびらです。そして、とびらには金色の字でこう書いてありました。

遠慮しないで、どうぞ、ご自由にお入りください。

二人はとても喜びました。

「今日はずっと運が悪かったけれど、最後にいいことがあるなあ。このレストランは、無料でごちそうしてくれるみたいだ」

「そうだな。『遠慮しないで』って書いてあるから、無料で料理を食べさせ

てくれるはずだ」

二人はとびらを^あ開けて、^{なか はい}中へ入りました。^{なか はい}中に入ると、^{ろう か}すぐに廊下がありました。とびらの^{うら}裏には、^{きんいろ じ}金色の字で^かこう書いてありました。

^{ふと}太った人^{ひと わか}や若い人^{ひと}は、^{だいかんげい}大歓迎。

「^{だいかんげい}大歓迎」と^か書いてあるので、^{ふたり おおよろこ}二人は大喜びです。なぜなら、^{ふたり わか}二人は若くて^{ふと}太っていたからです。

^{ふたり ろう か}二人は廊下を^{すす}進みました。すると、^{こんど あおいろ}今度は青色のとびらがありました。

「^{へん いえ}変な家だな。どうしてこんなにたくさんとびらがあるんだろう」

「^{ふう いえ}そうだな。たぶん、これはロシア風の家だ。^{さむ}寒いところや、^{やま なか いえ}山の中の家にはとびらがたくさんあるんだよ」

^{ふたり あおいろ}二人は、青色のとびらを^あ開けようとしてしました。そこには、^{きいろ じ}黄色の字で^{なに か}何か書いてありました。

このレストランは、^{ちゅうもん おお}注文の多いレストランです。^{ちゅうい}ご注意ください。

「^{ちゅうもん おお}注文の多いレストランだって。こんな^{やまおく}山奥なのに、^{にん き}人気があるんだな」

「^{とうきょう}そうだな。東京で^{にん き}人気のレストランも、^{ひと}人があまり来ない^こ場所にある^{ばしょ}だろう」

ふたりはそう言いながら、とびらをあけました。すると、そのとびらの裏にまた何か書いてありました。

ほんとうに注文が多いですが、がまんしてください。

「これはどういう意味だ？」と、一人の男が不思議そうに言いました。

「そうだな。これは、注文が多くて料理に時間がかかるけれど、ごめんなさいって意味だ」と、もう一人の男が言いました。

「なるほど、そういうことか。じゃ、早くどこかの席に座りたいな」

「そうだな」

と、二人は言いました。

ところが、また一つとびらがありました。そして、とびらのそばには鏡がかかっている、その下にブラシが置いてありました。とびらには、赤い字で

お客様さま、ここで髪をきれいにして、靴の泥を落としてください。

と、書いてありました。

「なるほど。僕たちはずっと山の中を歩いていて、髪も靴も汚れている」

「そうだな。でも、ルールが厳しいレストランだ。すごく偉い人が来るんじゃないか」

と、二人は言いました。そして、髪をきれいにして、靴の泥も落としました。すると、どうでしょう。台の上にブラシを置くと、ブラシも台もぼうっと消えて、風がどうっと部屋の中に入ってきました。

二人はびっくりして、急いでとびらを開けて、次の部屋に入りました。早く何か温かいものを食べたいなと思いました。早く温かいものを食べて元気にならないと、また変なことが起こるんじゃないかと、二人は思いました。

とびらの裏には、また変なことが書いてありました。

鉄砲と弾をここに置いてください。

とびらのすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど。鉄砲を持って料理を食べるのは、マナーが悪い」

「そうだな。このレストランには、偉い人がよく来るんだろう」

二人は鉄砲を台の上に置きました。また、黒いとびらがありました。

どうか、ぼうしとコートと靴を脱いでください。

「どうする？脱ぐか？」

「そうだな。しかたがない。脱ごう。でも、本当に偉い人が奥の部屋に来ているんだな」

ふたり
二人は、ぼうしとコートを脱いで、壁にかけました。そして、靴を脱いでぺた
ある
ぺた歩いてとびらを開けました。とびらの裏には、

ネクタイのピンやメガネ、さいふなどの金属、特にとがったものは、
ここに置いてください。

か
と、書いてありました。そして、とびらの横には黒い立派な金庫もありました。
かぎもありました。

「なるほど。何かの料理に電気を使うんだらう。だから、金属は危ない。と
とく あぶ
がったものは、特に危ない」

「そうだな。じゃあ、お金は帰りにここで払うのかな」

「たぶんそうだろう」

「そうだな」

ふたり
二人はメガネをはずしたり、ポケットからさいふを出したりして、全部金庫の
なか い
中に入れました。そしてかぎをかけました。

すこ い
少し行くと、またとびらがありました。そして、とびらの前にガラスのつぼが
ひと
一つありました。とびらには、こう書いてありました。

つぼの中のクリームを顔や手、足にもよくぬってください。

つぼの中^{なか み}を見てみると、牛乳^{ぎゅうにゅう}のクリーム^{はい}が入っていました。

「クリームをぬれというのは、どういうことだろう」

「そうだな。外^{そと}はとても寒^{さむ}くて、部屋^{へや}の中^{なか}が暖^{あた}かいから、顔^{かお}や手^てが切^きれてしま^まう。そうならないためのクリームじゃないか。奥^{おく}の部屋^{へや}には、本当^{ほんとう}に偉^{えら}い人^{ひと}が来^きているのかもしれないな。僕^{ぼく}たちは、こんな山奥^{やまおく}で偉^{えら}い人^{ひと}と仲良^{なかよ}くなれるかもしれないよ」

二人^{ふたり}は、つぼの中^{なか}のクリーム^{かお}を顔^てや手^てにぬって、それから靴下^{くつした}を脱^ぬいで足^{あし}にもぬりました。まだクリーム^{のこ}が残^{のこ}っていたので、二人^{ふたり}は顔^{かお}にクリーム^{かお}をぬるふりをして、こっそり食^たべました。

それから、急^{いそ}いでそのとびら^あを開^あけると、とびら^{うら}の裏^{うら}には、

クリームをよくぬりましたか？ 耳^{みみ}にもよくぬりましたか？

と、書^かいてありました。そして、小^{ちい}さなクリーム^{ちい}のつぼ^{ちい}がここにも置^おいてありま^おした。

「なるほど。僕^{ぼく}は、耳^{みみ}にぬらなかつた。耳^{みみ}が切^きれてしま^まうところだつた。ここ^このオナー^おナーは、本当^{ほんとう}に準^{じゅん}備^びがいいな」

「そうだな。細^{こま}かいことまで、よく気^きがつくよ。でも、僕^{ぼく}は早^{はや}く何^{なに}か食^たべたいんだけれど、廊下^{ろうか}ととびらばかりだな」

と、二人^{ふたり}はいいました。すると、すぐ^{つぎ}に次^{つぎ}のとびら^{つぎ}がありました。

りょうり
料理はもうすぐできます。

ふん
15分もかかりません。

た
すぐ食べられます。

はや
早くあなたのあたま
頭にビンの中のなか
香水をよくふ
振りかけてください。

そして、とびらのまえには、きんいろ
金色でピカピカの香水のビンが置いてありました。

ふたり
二人はその香水を、あたま
頭へぱちやぱちや振りかけました。ところがその香水は、
す
酔のようなにおいがしました。

「この香水は、す
酔みたいなおいだ。どうしたんだろう」

「そうだな。ウェイターがまちがえて入れたんだろう」

ふたり
二人はとびらをあ
開けて、なか
中に入りました。とびらのうら
裏には、おお
大きな字でこう書
か
いてありました。

ちゅうもん おお
いろいろ注文が多くて、うるさかったでしょう。すみませんでした。

さいご からだ
これが最後です。体に、なか
つぼの中のしお
塩をたくさんつけてください。

そこには、りっぱ
立派な青いつぼが置いてありました。ふたり
二人はぎょっとして、クリー
ムまみれの
かお
顔を見合わせました。

「どうもおかしいな」

「そうだな。ぼくもおかしいと思う」

「たくさんの注文ちゅうもんというのは、向こうが僕たちに注文ちゅうもんしているんじゃないかな」

「そうだな。このレストランは、お客きやくさんに料理りょうりを食べさせるのではなくて、お客きやくさんを料理りょうりにして食たべてしまうレストランということなんだ。つまり、ぼ、ぼ、ぼ、ぼくたちが・・・」がたがたがたがたがたがた。二人は震ふるえて、何も言えなくなりました。

「に、にげ・・・」がたがた震ふるえながら、一人の男ひとり おとこが後ろうしのドアを開あけようとしました。しかし、ドアはまったく動うごきませんでした。

廊下ろうかの奥おくの方に、もう一枚とびらがありました。そのとびらには、

ごくろうさまでした。
とても上手じょうずにできました。
さあ、中なかにお入はいりください。

と、書いてありました。そのとびらには、大きなかぎの穴あなが二つあって、かぎの穴あなからは、きよろきよろ二つの青あおい目玉めだまがこっちを見ていました。

「うわあっ」

「うわあっ」

二人は泣なき出だしました。

すると、とびらの向むこうで、こそこそと、こんな声こえが聞きこえました。

「だめだよ。もう気がついてしまったよ。体に塩をつけないよ」

「そうそれはそうだろう。ボスの書き方が悪かったんだよ。『いろいろ注文が多くて、うるさかったでしょう』なんて、書かなければよかったんだよ」

「もう、どっちでもいいよ。どうせボスはぼくらに骨もくれないんだから」

「それもそうだな。でも、あいつらがここに来なかったら、ぼくらがボスに怒られるぞ」

「それは、困るな。じゃ、呼んでみよう」

「おい、お客さん、早くこっちへ来てください。お皿も洗ってありますし、野菜も準備できました。あとは、あなたたちと野菜をお皿の上へのせるだけです。早く来てください」

「いらっしやい、いらっしやい。サラダは嫌いですか？それなら、フライにしましょうか。早くいらっしやい」

二人の男は、声も出ません。ぶるぶるがたがた震えて、顔をくしゃくしゃにして、泣いているばかりです。

とびらの向こうでは、何かが「ふっふっふっ」と笑って、叫んでいます。

「そんなに泣いたら、顔のクリームが落ちてしまいますよ」

「早くいらっしやい。ボスがいすに座って、ナイフとフォークを持って、待っていますよ」

二人の男は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのとき、うしろからいきなり「わんっ、わんっ、ぐわあ」という声^{こえ}がして、
2匹^{ひき}の大きな白^{おほ}い犬^{しろ}がとびら^{いぬ}をやぶって、二人^{ふたり}の男^{おとこ}のいる部屋^へに飛び込^とんでき
ました。2匹^{ひき}の犬^{いぬ}は、「ううっ」とうなって、しばらく部屋^への中^{なか}をくるくる歩^{ある}
ていましたが、「わんっ」ともう一度^{いちど}ほえて、いきなり次^{つぎ}のとびら^とに飛びつ^ときま
した。とびらはがたりと開^{ひら}いて、2匹^{ひき}の犬^{いぬ}はその向^むこうに走^{はし}って行^いきました。

とびらの向^むこうは、真^まっ暗^{くら}でしたが、「にゃあお、くわあ、ごろごろ」という
声^{こえ}がして、それから、がさがさと鳴^なりました。

すると、部屋^へは煙^{けむり}のよう^きに消^{ふたり}えました。二人^{おとこ}の男^{おとこ}はぶるぶる震^{ふる}えながら、草^{くさ}
の中^{なか}に立^たっていました。

辺^{あた}りを見^みてみると、コートや靴^{くつ}やさいふが、木^きの枝^{えだ}にぶらさがっていたり、草^{くさ}
の上^{うへ}に落^おちていたりしました。

風^{かぜ}がどうと吹^ふいてきて、草^{くさ}がざわざわ、木^この葉^はがかさかさ、木^きがごんごんと
鳴^なりました。

犬^{いぬ}が「ふうっ」とうなりながら戻^{もど}ってきました。そして、うしろから、「お一
い」という声^{こえ}が聞^きこえました。

二人^{ふたり}の男^{おとこ}は急^{きゅう}に元^{げん}気^きになって、「お一い、お一い、ここだ、早^{はや}く来^きてくれ」
と叫^{さけ}びました。途^と中^{ちゆう}で帰^{かえ}った案^{あん}内^{ない}の獵^{りよう}師^しが、草^{くさ}をかき分^わけながらやっ^きて来^き
まし
た。

二人^{ふたり}の男^{おとこ}は、獵^{りよう}師^しの顔^{かお}を見^みて、やっ^{あん}と安^{あん}心^{しん}しました。

その後、二人の男は東京へ帰りました。しかし、泣きすぎてくしゃくしゃになった顔は、お風呂に入っても、何をして、元には戻らなかったということです。

(4861字)

(Written by Kenji MIYAZAWA)

(2020.7 Adapted by Toru YOSHIKAWA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.